

---

# ブライ・シークレットエピソード

BEAST X

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブライ・シークレットエピソード

### 【Nコード】

N1353V

### 【作者名】

BEAST X

### 【あらすじ】

電脳獣がよみがえり、星河スバルがBAと争っている頃、孤高の戦士“ブライ”は、一人孤独な旅をしていた。「流星のロックマン4 BEAST X」と並行して起こっている世界を描いた、スピンオフ作品。

Episode・0 孤独な旅路(前書き)

この作品は本作「流星のロックマン4 BEAST X」と一緒に読むと理解しやすいです。

## Episode 0 孤独な旅路

少年の名はソロ。

ソロは、砂嵐吹き荒れる砂漠を独り、孤独にマントとゴーグルをつけて歩いていった。目の前はメートル程先しか見通すことができない。ウィザードも両腕で顔を覆っている。砂嵐の砂が皮膚にあたり、ときどき痛みを感じる。ソロは、方角も分からないまま、地平線へと歩き続ける。

「ラプラス・・・ハンターへ戻れ」

《・・・・・・・・》

ウィザードは返事無しで、静かにハンターへと入った。入る前に少し戸惑った様子を見せた。たぶんこういう言葉をあまりかけられたことがないからだろう。砂嵐が再び強くなる。ソロはマントが飛ばされないように体に引き付けた。

「クソッ！ 一体どっちに行けばいいんだ・・・」

ソロが言うと、ラプラスは黙って左を指差した。

《・・・・・・・・あっち・・・》

ラプラスは無愛想に言った。普段声を出さないのも恥ずかしいのだ。ソロはラプラスの指差した方向へ歩き出した。

「本当にこっちでいいんだ・・・？」

《・・・・・・・・・・・・・・・・》

ラプラスは黙ってうなずいた。また一段と砂嵐の強さが増す。ソロは、本当にこっちで大丈夫なのか、と思ったが歩き続けた。

砂嵐の中は、朝なのか夜なのかも分からない。昼なのかもしれない。しかし、砂と風の幕のせいで分らない。

もう何日歩いた・・・？いつからこの状況なんだ・・・？帰れるのか・・・？いや、俺に帰る場所なんてない・・・。いつそ、このまま砂に埋もれるか？

ソロの頭の中にはいろいろな考えが浮かんだ。

砂嵐の勢いは止まるどころか強くなっていく気がした。ソロは、その疑問の答えをもうすぐ知ることになる。

それは、ラプラスの指差した方向へ歩き始めてから4～5時間たった頃だった。あたり一面砂だらけだったはずが、急に開け、風だけが吹き荒れる地帯に入った。そこにいたのは、赤い翼、黄色い嘴、そして白い羽毛のような鎧。それは、電脳獣ファルザーだった。その時、ソロはラプラスの指差した方向の意味について分かった。この砂嵐の中、電波も一切通じない中で、ラプラスはこいつの電波を感じ取ったのだ。

ソロは、マントを脱ぎ棄て、ゴーグルを目から外し、言った。

「トランスコード002、ブライ！」

## Episode 1 ファルザー

ブライは今、赤い電脳獣ファルザーと対となって立っていた。風は止み、ファルザーもブライの異様な威圧感に感づき、威嚇していた。

ギヤアアアス！

先に動いたのはファルザーだった。鋭い羽根を無数に飛ばしながらブライの周りを旋回した。

鋭利な羽根が、雨のようにブライに降り注ぐ。ブライはラプラスソードを取り出し、あらゆる方向から飛んでくる羽根をはじいた。

「くっ……！！（受けきれん……！）」

ブライはそう思い、剣で応戦するのを諦め、身を縮めて防御した。

無数の羽根がブライの体を切り裂いてゆく。ブライだけでなく、周りの地面にも羽根が突き刺さり、砂が舞いあがった。

巻きあがった砂がブライを隠し、ファルザーは一旦攻撃を止め、風で砂を吹き飛ばした。

ギヤアアス！

しかし、巻きあがった砂の中心にいたはずのブライが消えていた。ファルザーは周りを見回したが、姿はなかった。

「ツフ・・・！ 貴様の力はこんなものなのか？」

突然の声にファルザーは驚いた。なんと自分の翼の裏側にブライは隠れていたのだ。

ブライは翼を台にし、上空へと飛んだ。

「くらえ・・・ブライブレイク！」

ブライは落下の速度で威力をあげ、ファルザーの胸元へと突っ込んだ。

ギヤアアアア・・・！

それは直撃し、ファルザーは苦痛の声を上げて、地面に衝突した。

ブライはファルザーの落下地点より100メートルほど離れたところに着地した。

「まだ戦えるんだろ・・・？ さっさと起きてこい・・・これくらいでやられるなら興ざめだ」

ブライの挑発が頭にきたのか、砂埃の中で巨大な黒い影が起き上がった。

グガアアアア！

「！！」

突然の攻撃だった。砂埃の中から高速音波が飛んできたのだ。当

然、音速なので避けられなかった。ましてや突然の出来事だったから反応が間に合わなかった。

「ぐわああー！」

ブライは吹き飛ばされ、数百メートル先の岩にぶつかった。

「うぐ……！ み、耳が……！」

ファルザーの発した音波は聴覚を数分間失わせる特殊なものだった。

「これでは……！」

ブライは左手で耳を押さえ、右手で剣を持って立ち上がった。しかし、脳にも影響があり、目の前もぼやけていた。

ブライの目には巨大な黒い影が見えるだけだった。

「(まともに戦えない……！ どこだ！)」

ブライは辺りを見回した。そして、正面を向いた時だった。ファルザーが目の前に浮遊していた。

「……！(まずい！)」

ブライは後ずさりしたが、後ろが岩ということに気がついた。

ギヤアア！

ファルザーは足でブライを岩に向かって蹴りつけた。

ブライのムーの障壁は一瞬で粉々に粉碎され、直撃した。ブライのウェーブプレディクターはヒビ割れ、右目部分があらわになった。ブライはその場で膝をつき、倒れた。その後、今度は倒れたブライをファルザーは足で踏みつぶした。

「ぐああああ・・・！」

ファルザーは足に全体重をかけた。ブライの体からメキメキと音が響いた。

ギヤアアアス！

ファルザーはブライから足をはなし、上空へ飛んだ。そして、ブライにとどめをさす準備が整った。

Episode 1 ファルザー (後書き)

感想待っています！

## Episode 2 ラプラス(前書き)

申し訳ございません。「BEAST X」に夢中でこちらの執筆  
忘れてました。

こちらにも楽しんで頂いていた方々、申し訳ございませんでし  
た。> ( | | ) <

## Episode・2 ラプラス

ブライの倒れこんでいるはるか上空で、ファルザーは力を溜めていた。

「ぐ……………ここまで……………か……………」

ブライは、眩しい太陽と重なっているファルザーを見つめながらつぶやいた。

逆光のせいで、ファルザーの姿が一瞬悪魔にも見えた。

真っ黒な姿で、鋭い目だけが、黄色く光っていた。

「俺は……………こんなに……………弱かったのか……………」

ブライは初めて感じる“死”を目の当たりにして、ポツリとつぶやいた。

ギヤアアアス！

「……………来るならいつでもいいぞ……………もう覚悟はできている……………」

準備が整ったファルザーの周囲には、赤いオーラ……………。

逃げる体力もないブライは、そばにあった岩にもたれかかり、“死”の覚悟をした。

ギヤアアアアアアス！

ファルザーは再び鳴き声を上げて、地面に向かって急降下してきた。

ファルザーは地表近くで方向を変え、ブライに向かって猛スピードで突っ込んできた。

もちろん、先端にある鋭いクチバシで一突きにするつもりだ。

溜めていたパワーはブライに近づくにつれて、クチバシの先端に集中してきていた。

「俺も……ここまでか……」

《……………諦めては……………ダメだ……………》

ラプラスは静かにつばやいた。

「……………！？ ラプラス……………！」

《……………》

その後、ラプラスは剣から電波体へと変身し、ブライの目の前に現れた。

「まさかっ！ 貴様が盾になるとでもいうのか！」

《……………》

ラプラスは黙って頷き、両手を前に突き出した。

ギヤアアアア！

「お前は逃げるんだ……………ラプラス！」

ブライは止めたが、ラプラスはそこをどく気はまったくなく、紫のオーラがラプラスの体を覆った。

そして、ファルザーがラプラスと激突した。

グギヤアア！

《……………つつ……………》

二人の間では赤紫の閃光が飛び散った。

ラプラスは完全にパワー負けしていたが、必死に耐え、ファルザーを押し戻そうとした。

「つつ……………馬鹿め……………」

ブライはそう言って、ラプラスの前後にムーの障壁を出現させた。

一枚はラプラスとファルザーの接触面。もう一枚はラプラスの背中に。

これで少しは役に立つだろうと思っていたブライだったが、障壁は一瞬で割れてしまった。

「……………無理か……………」

《……………まだ……………負けたわけではない……………》

「！」

ラプラスはまたボソつとつぶやいた。

「フンツ……………貴様に言われる筋合いはない……………！」

さつきまで死にぞこないだったブライの目がキラリと光った。

その直後だった。

ラプラスがファルザーの強いオーラに弾き飛ばされ、数百メートル先に飛ばされた。

「……………！」

ギヤアアアス！

ファルザーは体制を立て直し、今度はブライに向かって鋭い爪をたててダイブを仕掛けてきた。

《……………》

その攻撃はブライごと背後にあった巨大な岩ごと粉々に粉碎した。

ラプラスは遠目でそれを見ていたが、ラプラスは表情ひとつ変えなかった。

ギヤアアス！ ギヤアア！

ファルザーは勝ったと言わんばかりに幾度も叫んだ。

《……………ソロ……………》

ラプラスはボソっとつぶやいた。

その意味は、悲しみの意味ではなく、期待の意味を込めて言ったものだった。

「……………まさか……………俺がお前に助けられるとはな……………」

！！

砂埃の中から、黒い人の影がゆらりと現れた。

ファルザーは驚いて少し距離をおいた。

「ラプラス……………礼を言う……………」

《……………》

そう言って、砂埃の中からココウノヤミを右手が隠れるほど増幅させたブライが姿を現した。

「今度は……………貴様が狩られる番だ！」

Episode 2 ラプラス（後書き）

感想待ってます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1353v/>

---

ブライ・シークレットエピソード

2011年10月10日12時25分発行